

茅 風

— Breeze from the field of thatch-grass —



2013年9月22日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信 40号



上ノ原は昆虫たちのゆりかご！ (2～3頁、是非ご覧下さい)

◆6月～9月の活動報告 (事務局)	1
◇季節のミニアルバム I : 夏の蝶たち (多葉田五男)	2
□特集: 一般参加歓迎プログラム2013②	4
・青木沢峠の道普請顛末記(事務局)	
・初参加体験記～印象に残ったこと(片山健史)	
・オープンプログラムに参加して(遠藤光子)	
□奥利根水源の森フィールドワークの振り返り(事務局) ...	6
～優しい母なる自然と厳しい父なる自然～	
□東京「学習会」2013①参加レポート(米山正寛) ...	7
◆みなかみ町役場木村伸介さま(笹岡達男)	7
～本当に長い間ありがとうございました。これからも～	
◆赤紫蘇ジュースづくり秘話(清水英毅)	8
□真夏の青刈り奮闘記(松澤英喜)	9
☆会員便り: 定年退職記念「中山道旅日記」(海老沢秀夫) 10	
◆藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑥(中村智子) ...	11
○編集後記～塾長のつぶやき～	12
◆参加者募集案内: 10月26日～27日茅刈りイベント ...	12

■ 6月～9月の活動報告

事務局

●6月15日-16日: 一般参加歓迎プログラム 2013②。古道・青木沢峠のフットパス歩きとブナ林整備。参加 14 名、含む日帰り 3 名。(→4頁参加者レポートご参照)

●6月29日: 全国草原再生ネットワーク第7回定時総会。浅川、増井、清水が参加、次回「全国草原サミット」開催候補地に関わる情報提供と意見具申。

●7月5日-6日: 麗澤中学「奥利根水源の森フィールドワーク」で中学1年生164名と教師陣10名の受入。スタッフは東京から8名、地元から10名、計18名の大部隊となった。(→6頁、振り返りレポートご参照)

●7月13日: 東京「学習会」2013 第1回。稲幹事のご設営で「利根川の湖沼で学ぶ～茨城県自然博物館編」開催。参加15名。小幡副館長様に大変お世話になり、ありがとうございました。(米山レポート→7頁ご参照)

●7月27日-28日: 一般参加歓迎プログラム 2013③開催。ススキ草原の防火帯整備と植生調査。猛暑のせいでしょうか、参加者は過去最少7名！ 夜は、みなかみ町役場で当塾窓口担当を長年お勤めいただいた木村さんとは後任山口さんの歓送迎会。(当塾を代表して笹岡顧問からの謝恩メッセージ→7頁ご参照。必読です)

●8月4日-6日: 「のらえもん」古高会長ならびに山口さんファミリーと『遊山館』を拠点に赤紫蘇ジュースづくりの実践。お宿はロッジ「樹林」、惣一郎さん、京子さん、千恵美さん、そして協働して下さった地元の大勢の皆さま方お世話さまでした。(詳細レポート→8頁ご参照)

●8月23日: 笹岡顧問、草野塾頭、浅川幹事、松澤幹事の当塾精強部隊が、雷雨の上ノ原で決死の青刈り断行。2年連続中止の苦渋を飲んだ野焼き。来年度野焼きの安全・確実実施にむけて万全を期す意気込み！

(迫真の松澤レポート→9頁ご参照)

●8月24日: NPO ベイプランアソシエイツ主催「サンセットクルージング」に、当塾会員・会友24名が参加。ジャズバンドの生演奏に耳傾け沈む夕陽を眺めながら、かつての利根川の河口・東京湾と三番瀬の今昔に思いをはせた。「流域コモンズ」活動の一環。

●9月2日: 東邦大学に西廣淳先生を訪問、イオン財団・環境活動助成応募に関わるご推薦と向後の当塾活動のご指導をお願いに参上。(松澤、清水) ご快諾いただいた上に、秋の茅刈りには是非参加したいとのご意向をいただき、たいへん心強く嬉しいことであつた。

●9月14日: 麗澤中学「麗鵬祭」。奥利根水源の森フィールドワークでの気づき・学びの発表会。笹岡、湯本、高野、川端、清水が参観、生徒諸君と再会！参観後、竹政校長先生にご挨拶・懇談。

(以上)



火入れを安全確実にする防火帯。完成間近です！

◆季節のミニアルバムⅠ：夏の蝶たち

多葉田五男

長きにわたり、上ノ原と周辺の生き物たちの姿を撮りつづけてこられた多葉田さん。今号から「季節のミニアルバム」として、四季折々の美しい写真をご紹介します(編集子)

平成15年に「森林塾青水」に入会しましたが このところ何年も活動に参加出来ませんでした。思い立って6月10、11の両日、一人で久しぶりに現地を訪ねてみました。

この地区はまさに自然の宝庫で 懐かしい風景とたくさん生き物達が迎えてくれました。最初に訪れた上ノ原フィールドではエゾハルゼミの湧き上がるような大合唱が圧巻でした。カッコウやホトギスの鳴き声も遠くから聞こえて来ました。ちょうどウスバシロチョウの発生時期で優雅に飛ぶ姿を見る事が出来ました。

その後7月27、28日の両日 森林塾の活動プログラムに参加し、生き物達の写真を撮ってきました。この夏の2回の訪問結果と過去に撮った写真から藤原地区で夏に見られる蝶を選んで紹介致します。

藤原の自然の豊かさの一端をお伝えすることが出来れば幸いです。



③アサギマダラ(約 100cm)



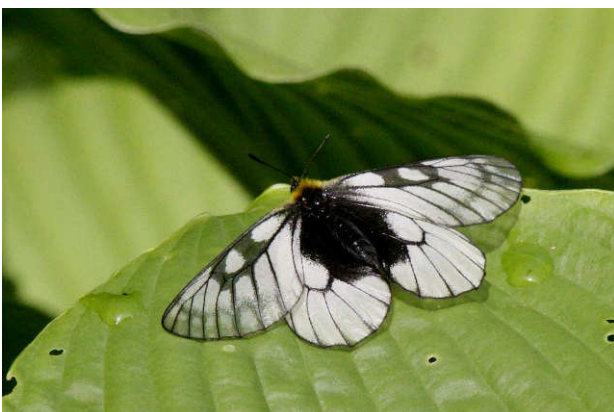
④ヒオドシチョウ (60~70cm)



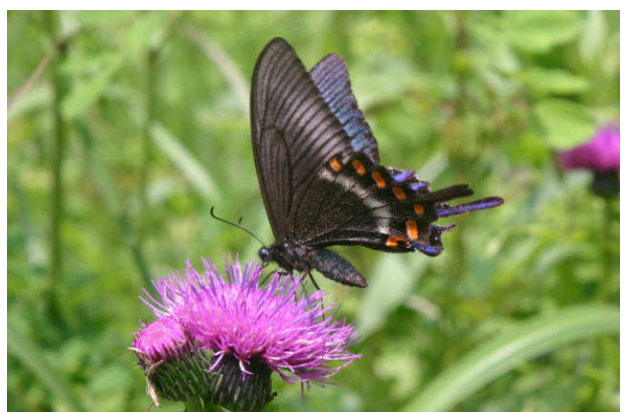
①ギンイチモンジセセリ(翅開長 30~34mm)



⑤カラスアゲハ(80~110cm)



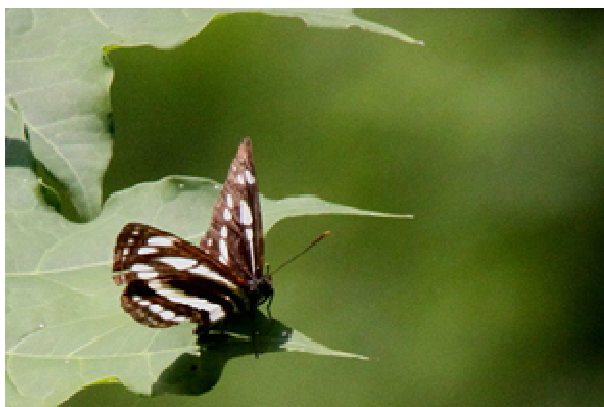
②ウスバシロチョウ(約 60mm)



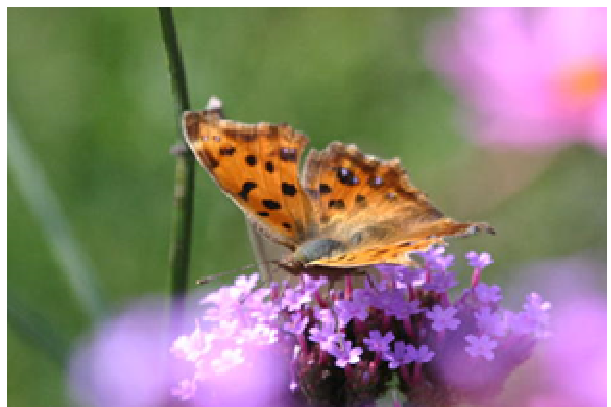
⑥ミヤマカラスアゲハ(70~100cm)



⑦クジャクチョウ(翅開長 40~50mm)



⑪コムスジ(45~55mm)



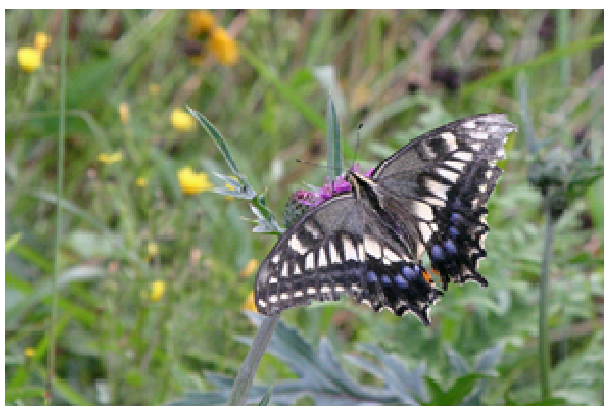
⑧キタデハ(50~60mm)



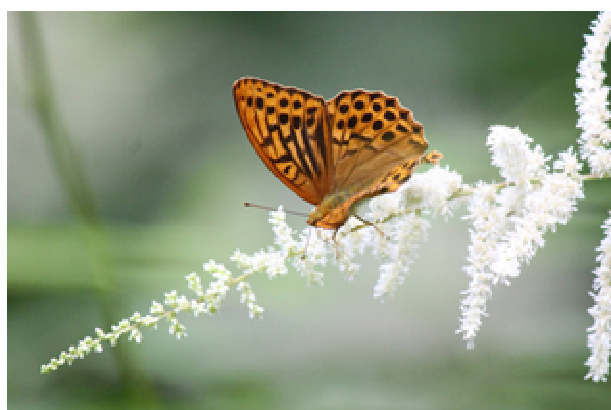
⑫ヒメシジミ交尾(27~31mm)



⑨ウラギンヒョウモン交尾(55~65mm)



⑬キアゲハ(70~90mm)



⑩ミドリヒョウモン(65~80mm)



⑭サカハチチョウ夏型(35~40mm)

■特集：一般参加歓迎プログラム2013② スタッフ＆参加者レポート

装い新たに始めた「一般参加歓迎プログラム」。果たして、謳い文句通り一般参加の皆さま方にご満足いただける内容になっていたのでしょうか。以下、スタッフの反省と初参加お二人のご感想です。（編集部）

◆青木沢峠の道普請願末記 事務局 —ひどい目にあったこと、嬉しかったこと—

「一般参加歓迎プログラム」2013②の初日・6月15日午後。首都圏からの宿泊組11名に地元から日帰参加の3名が合流、計14名が師入の集落センターに集合。各々、草刈大鎌、唐鋤、レーキなど携え、小雨降る青木沢峠に入った。作業目的は、夏以降に予定の麗澤中「奥利根フィールドワーク」や民宿組合主催「秋の健康ハイキング」の受入れに備えた道普請とブナ林観察路づくり。

まずは、つもりつもった落葉を掻いて谷側に寄せ落とす作業から始めた。ついでに、山側の地面も引っ掻きならして歩きやすい道にする。実は、落葉の山に潜む“ヒル”を排除するのが主たる目的だった。雨にも負けず皆さん懸命



に取り組んで下さり、作業は順調に捗っていた。ところが、頂上へ道半ばくらいのところで雨が

激しくなってしまった。止む無く作業中断、峠の十二神様にご挨拶して青木沢入口に下り、車で集落センターまで戻った。

そこで、大騒ぎになった。全員がヒルにやられていて、大方が吸血されていることに気づいたのは宿に戻ってからのことだった。

楽しみにしていたブナ林観察路づくりも果たせず“昼間ヒル退治に行ってやられて退散”など下手なオヤジギャグが飛び出す始末だったが、実は嬉しいことも沢山あった。

- (1) 地元の林幸男さんが、峠道沿いに区分所有する美しいブナ林内に散策路を造ることを快くご了解いただいた上に、我々の作業に先立ってヒル退治用の薬を撒いて下さっていたこと。
- (2) 米山正寛さん（森林文化協会＝当塾コラボレーター）が、今回も朝日新聞紙上で参加者募集をして下さり、お蔭で素敵な3名の一般参加者を仲間に加えることができた。その上に、年寄りの荷物をさりげなく持ったり、食事の席でビールや酒を注いだりと、我々ホスト役顔負けのきめ細かい心配りをして下さったこと。
- (3) 地元から一幸さん、真人さん、久保さんと屈強の男衆が3人も協働作業に参加してくれたこと。
- (4) 同じく地元の親男さんが、青木沢の橋の手すり・欄干

を事前に立上げ、整備して下さいだったこと。お蔭さまで2日目の芦ノ田峠は全員無事、武尊川沢を渡り終え、ヒルに出会うこともなく気持ち良く完走できた。

- (5) 今回も岡田幹事が、野点のご用意をして下さいだったこと。2日目の上ノ原散策終了後、十郎太沢の水で美味しいお茶を点ていただき、全員ほっくりと寛ぎのひと時を持つことが出来た。

などなど、書ききれないくらい沢山の嬉しいこともあった2日間であった。

2013. 6.17(清水)

◆初参加体験記 ～印象に残ったこと、など

片山 健史

2013年6月15,16日に開催された標記プログラムに参加しました。プログラム名は 古道「青木沢峠～芦ノ田峠」のフットパス歩きとブナ林整備。朝日新聞に小さく出た案内記事を女房が発見して教えてくれたのが契機でした。

そもそも私は山野や里の自然を歩くのが好きで、奥多摩の山々、尾根を通る昔の生活道や古い峠道などをぼつぽつと歩いています。今回のプログラムは私の好奇心を十分に刺激するものでした。ブナ林整備というと本格的な山仕事にも見えますが、実際は利根川源流域の集落をつなぐ古道に降り積もった落ち葉を掻いて通りやすくする程度で、自然林の豊かな森と、自然に恵まれた美しい集落を訪ねる楽しい旅になりました。

以下今回のイベントで経験したうちで印象的ないくつかについて書いて見ます。

(樹幹流)

森の中の古道、青木沢峠越えの森は広葉樹で緑いっぱい。セミが鳴き、鳥の声もして気持ちいい。峠道の落ち葉掻きをしていると突然ぱらぱらと音がしたと思ったら、雨が降り始めた。すぐに葉を打つ音がザーッと激しくなり、本降りに変わる。しかし、木々の緑の傘に守られて、森の中にはすぐには水滴は落ちては来ない。だが、濡れはしないものの、森の中はうるさい雨音で、セミも小鳥も聞こえなくなる。そのうち森の中にも水滴が落ち始めた頃、傍のブナの大木の幹を水が流れ始めた。樹幹流だ。白神山地を紹介したテレビの自然番組で、葉で受けた雨が葉柄を伝い枝



を伝って幹に集まり、ブナの幹を勢い良く水が流れ下る映像を見て、自然の仕組みに感心していたが、実際に間

近にこれを見られるとは思わなかった。

私も田舎育ちだが、このような樹幹流は見た事が無い。ブナは無い地域だったせいもあるだろうが、樹幹流を起こ

す樹木は他にもあるのだろうか。この貴重な経験を動画に残したかったが、カメラは雨を避けて、既にポリ袋に包んでしまっていたのであきらめて、眼に焼き付けるだけに留めた。

（山蛭騒動）

雨にも負けず、落ち葉掻きを続けていたが、だんだん森の中にも雨が滴ってきた。特に木々が少しまばらで空が見えるところでは雨も激しい。出発時の好天に騙されて、雨具を車においてきた我々はずぶぬれになってくる。暖かい雨なので濡れてもあまり気にならないとは言うものの、とうとう作業を中断し、帰途につくことにする。一部の人は引き返して、森の出口に車を回してもらうことになり、残りの我々はそのまま青木沢峠越え古道を歩いて程なく森を抜けた。



ここで、前方の女性陣から悲鳴があがる。どうも山蛭を見つけたようだ。雨の中で、わが身も、確認してみるとやはり蛭が付いている。靴周り、スパッツ、ズボンなど、大きくは無いが、思ったより多数いる。背中など見えないところは隣の方と確認しあって、取っていく。周りを見るとどういいうわけか女性陣の方が多くついているようだ。森林塾の草野さんが用意の木酢液のスプレーをかけると蛭はおとなしくなり取りやすくなる。皆、おおよそ取り終わったつもりで迎えの車に乗るが、その中でも新たな蛭が次々に見つかる。宿の入口で再度点検し終わったつもりで、部屋に上がって着替えを始めるとまだ次々に出現してそのたびに大騒ぎ。その後、スキー場の大きなホテルの温泉に出かけて汗と雨を流して何とか一段落。気持ちよく宿に帰った。

夜の懇親会でもこの話題で持ちきりであったが、しかし、この騒ぎ翌朝まで続くとは思わなかった。

この山蛭、昔はこの地区にはいなかった由だが、何年か前の雪が少ないとき、イノシシがこの辺に進出してきてこれに伴って山蛭も始まったとの事。どこにもいるわけではなく、翌日の芦ノ田峠道では全く見かけなかった。今回は話のネタになった程度であり実害は無いようなものの、これが拡がらないと良い。そのためにも今回のような古道整備が必要ということで、納得。

（古民家と集落）

翌日、芦ノ田峠のフットパス整備の前に起点の平出集落を散策。ここ藤原地区の古民家は妻側にも屋根の差し掛けがある独特の美しい構造をしている。今では萱葺きがそのまま残っているところは多くないが、表面を瓦屋根風など様々なトタンで覆ってあるなどで、家の形は古風を維持しているようだ。古い民家の形は残してきれいに住んでおられる集落は、落ち着いて美しい。ここに移り住みたくなる人たちもむべなるかな。ここ以外でも民宿のあった関が原地区は、スキー場の下手に当り、民宿やペンション、ロッジなどを名乗るしゃれた建物が古民家と交じり合って美しい景色を作っている。若い人たちも移り住んで、森林塾青水

の活動も地元の人たちとの連携でうまく進んでいる様子が伺えた。

（植物観察）

今回参加の動機のひとつは山野草の観察。いつもの山歩きでは、見かけた花などの名前はすぐには判らない。写真を撮って帰ってインターネットなどで検索し、時間をかけて名前を同定するのも楽しみの一つではある。今回は森林塾のメンバーの方々が、そもそも詳しい方ばかりに加え、外部参加の人たちも非常に詳しい。何か花などを見かけるたびに廻りから即座に名前が出てくる。しかも花だけでなく、葉や枝、幹の色や形から似ていても異なる植物名を教えていただけるなど、驚くばかりであった。

この利根川源流域と、私が良く歩く奥多摩近辺とは標高の違いなどもあり、色々変わった植物が観察できたのは大成果。おかげでこの旅で私の花の写真ライブラリーがずいぶん充実した。

（終わりに：森林塾青水）

リーダーの清水さん、塾頭の草野さん始め、皆さんの熱意と行動力には感服しました。

我々参加者をきめ細かくサポートしていただいていたおかげで2日間を楽しく過ごすことが出来ました。

また、地元の方々と一緒になっての活動がどんどん広がっている様子も素晴らしく感じられました。

また機会があれば参加したいと思います。

本当にありがとうございました。

（了）

◆オープンプログラムに参加して

遠藤光子

春になると特に「森へ行きたい」思いに駆られます。落葉広葉樹の森の持つ生気をもらいに新聞の片隅で見つけたプログラムに参加しました。

みなかみは「温泉と利根川」くらいの知識で初めて訪問した土地ですが、気持ちのよい緑と山に囲まれ豊かな水が印象的です。

野焼きで復活させた茅場は往時の規模をだいぶ縮小しているそうですが、初めて耳にする「えぞはるぜみ」の大合唱がとぎれることなく聞こえるのも珍しく、谷ウツギの花に彩



られて鮮やかでした。帰宅後YouTubeで「野焼き」の映像を発見。雪の残る時期に行うことを知りました。ぜひ参加してみたいです。

他の参加者の皆さんが植物に詳しくて、植物の名前を図鑑で探したり、野点など、アウトドアを楽しむ術をよくご存知です。1 日目の午後

は予報どおり雨に降られて生まれてはじめてヒルの洗礼も浴びテンションがあがりました。

古道は地域に昔からあるそのままの風景を楽しめる道なので、歩きがよいがあります。

それに山中の道は通る人がいないとすぐにやぶにもどってしまうことになるので、草刈などの適度な整備は必要でしょう。今回は草も少なく活動としては物足りず、夏にまたやりますか？

森林塾で再生中の兜屋根の古民家を拝見しましたが、ロケーションがすばらしくて驚きました。

再生後はカフェにのこのことですが、上州の養蚕つながりで座繰り、いざり機など手仕事の道具をそろえて地元のおばあさんに教わるなんてことができれば楽しいですね。(実は私のやりたいことです)壁塗りなどお手伝いしたいですねえ～

魅力的なフィールドで、地元の人と共に息の長い活動をされている「森林塾」を知って有意義な2日間を過ごすことができ、ありがとうございました。

思いがけず水上から高崎まで初のSLに乗車して楽しみながら帰りました。(了)

□ 奥利根水源の森フィールドワークの振り返り

～優しい母なる自然と厳しい父なる自然～

今年で8回目になる麗澤学園「奥利根水源の森フィールドワーク」の受入れ。中学1年生164名をお迎えし、当塾サイドのインストラクター18名をもって2泊3日の合宿研修のお付き合いをさせていただいた。



7月5日午後:東京組インストラクター8名で、下見かねた散策ルートの下草刈り。都会育ちの子供たちを気遣って、クマイチゴやノアザミなど棘のあるものを重点的に刈り払った。果たしてそれで本当に良かったのか？ 自然の恵みや優しさだけでなく、その反面の厳しさや荒々しさにも気づいてもらった方が良かったのではないかと反省。6日9時～16時:上ノ原での自然観察ならびに侵入樹木の伐採と芦ノ田峠のフットパス歩き。



6日夜:高野、川端、清水のプラチナ・トリオが生徒たちと同じホテル・サンバードに投宿、山本学年主任、北岡、寺坂、折笠の先生方と本日の振り返り反省会。皆さんたいへん熱心かつ前向きで、来年以降の改善が期待できる白熱の意見交換会となった。その中から、富山和子先生の名著『川は生きている』を、先生方が事前に回読し副読本にすることを検討したい、という話まで飛び出した！この本は、講談社青い鳥文庫の「自然と人間」シリーズの一巻である。しかも、中学1年生の自分(ゆめ)プロジェクトのテーマは「自然と人間」の関係を知ること、自然の恵みに感謝し、自分は何をなすべきなのかを考えること。副読本として、これに勝るものはあるまい！ そういえば、学園が掲げる教育目標は「仁草木に及ぶ」だった。ならば、上ノ原の“草木塔”を案内するべきだった。先生たちにも配布したフットパス地図のど真ん中に表示されていたのに！ 今ころ気がついても後の祭りだが、来年は是非、散策コースに入れたいもの。

7日午前:プラチナ・トリオが生徒たちのグループ討議、まとめ作業にお付き合い。

あるグループで「利根川の河口は日本海？」とのやりとりに出くわして唖然。生徒たちが持ち歩いているフィールドノートの裏表紙に、利根川がでんと横たわる関東一円の地図があるんだけどな……。でも、めげずにゼロから丁寧に説明しました(トホホ) そこへ別のグループからお声がかかって、緑のダムから用水路や田んぼを通過してコンクリートダムに至る水の流れについて確認する質問があった。やれやれ、救われた(笑顔)



地元組インストラクター8名の皆さま方には、「今年は来年の下見と心得て、来年もまたよろしく」とお願いした。学校サイドとも協働して、いわゆる“教育旅行”の模範プログラムを目指して頑張りましょう、とプラチナ・トリオが気焔をあげたことであった。

2013. 7. 8(清水)

□ 東京「学習会」2013①参加レポート

7月13日(土)

「利根川の湖沼で学ぶ～茨城県自然博物館編」

米山正寛

2013年度第1回東京学習会に参加し、利根川水系の下流域にあたる茨城県菅生沼と、その西側に立つ茨城県自然博物館を訪ねました。同館企画課長の小幡和男さんは、今年4月の森林塾青水総会などで講師を務めてくださったことがあり、この日も沼周辺の案内を引き受けていただきました。

菅生沼は南北約5km、東西の幅300～600mの谷状の湿地です。面積は約230haで、県の自然環境保全地域に指定されています。沼には飯沼川、江川、東仁連川が流入し、2km余り下流で利根川に合流します。大雨で利根川が増水すると、利根川からの逆流を防ぐ目的で、菅生沼の下流にある法師戸水門が閉鎖されます。すると沼に流入した飯沼川などの水がせき止められるため、沼の水位は高くなります。こうした時に、上流から運ばれてきた大量の泥が、沼にたまっていきます。1994年の博物館開館時、館の前には広い水面が広がっていたそうですが、泥の堆積が進んだ結果、水面は大きく減少して、ヤナギ類などの生えた陸域が目立ってきているそうで、ここ20年ほどの間にも、刻々と姿を変えているとのことでした。かつて洪水で運ばれた泥や繁茂した水草は、冬場の「どろとり」と夏場の「もくとり」によって沼から周辺の農地へ肥料として持ち出されていましたが、こうした作業が途絶えてしまったことも、沼の変化を加速しているのかもしれません。

博物館から対岸までは、「菅生沼ふれあい橋」という木橋がかかっており、この橋を渡りながら、小幡さんから沼の植生に関する説明を受けました



湿地の植物を間近に観察できる「菅生沼ふれあい橋」

水辺を好むヤナギ類のうち、ここで見られるのはマルバヤナギ、タチヤナギ、カワヤナギです。マルバヤナギは新芽が赤いのでアカメヤナギとも呼ばれます。湿地環境に育つイネ科の草本類も多く、特に目立ったのは水際を好むマコモ、その内側に生えるヨシ、さらに陸側のオギといったところ。フランクフルトソーセージのような穂を付けるガマ類も3種類(ガマ、ヒメガマ、コガマ)が観察できるそうです。全国の水辺や河川敷には侵略的な外来種がはびこって問題になっています。ここ菅生沼も例外ではなく、高さ数mに育

ったオオブタクサや橋の欄干に巻きついたアレチウリの姿も見ることができました



菅生沼の東岸から西方向を見た光景。列状に並ぶヤナギ手前あたりが、野焼きされている草地だ

この日は観察できませんでしたが、全国でも菅生沼と渡良瀬遊水地くらいでしか、まとまって自生していないとされる希少植物(絶滅危惧Ⅱ類)がタチスミレです。オギやヨシの中に育ち、スミレなのに草丈が時に1mにもなるというから驚きです。河川の氾濫原などが本来の生育地なので、今では草刈りや火入れといった人の手による攪乱がなくなると、その存在も途絶えてしまいかねません。小幡さんたちは、菅生沼のタチスミレ個体群を守ることを大きな目的として、2003年から草地の野焼きに取り組んでおられます。2014年には1月26日の実施を計画しているそうです。

(了)

◆ みなかみ町役場木村伸介さまへ 笹岡達男 ～本当に長い間ありがとうございました～

森林塾青水の活動にとって、木村さんは最早空気のように、当たり前かつ、なくてはならない存在となっていました。数えてみれば丸々10年以上、森林塾青水の窓口をお務めいただいたのだと聞いて、改めて木村さんご本人にはもとより、町村合併という節目も越えながら継続的な対応を保証して下さった町当局にも感謝の気持ちで一杯です。お陰様で私たちは、町と塾とが上ノ原の貸借契約を結んだ2003年春以来、常に町や地元の皆さまと共に現地での活動の楽しさを満喫させていただくことができました。振り返ってみると、そのほとんどの場面に(仮に後ろ姿であってもその大きさから隠れようのない)木村さんのお姿を見つけることができます。



2003年5月19日 腰越町長(当時)と塾メンバーとの対面式を行った翌日、観察会(雨呼山)出発前

□ 赤紫蘇ジュースづくり秘話

～のらえもん&地元衆との協働作業3日間～

30 kgの赤紫蘇から96ℓの紫蘇シロップを作りました。

3日間の記録とそれにいたる秘話のご紹介です(編集子)

8月4日午後:古高、清水が藤原入り。まずは、紫蘇育成に協力して下さった「樹林」ならびに「やまびこ」の紫蘇生育状況視察。続いて、作業拠点「遊山館」の館内清掃、設備点検と周囲の草刈り。



8月5日午前:山口アミリーが合流。惣一郎、多み子、典子(敬称略)も参加して、紫蘇収穫作業(写真上)→遊山館に搬入→洗浄作業→束ねて乾燥(写真下)



同日午後:惣一郎、一幸親子、美千代、智子、北山・同夫人、ほか三々五々来館。葉のむしり取り作業→計量:30 kg→シロップ(原液)づくり作業(以下の手順で夕食をはさみ22時半まで!)(写真下)



葉1:米酢2の比率で大鍋に入れ、押しつぶしながら煮ること(20分弱)

②30分～1時間おいて、冷めたところで絞る

③砂糖2と塩少々(かくし味)を加えた器に絞り汁を入れて攪拌

④5分ほど加熱処理(沸騰寸前に火を止める)



2004年4月18日 山の口開け・40年ぶりの野焼き

とりわけ重要イベントにおける木村さんの出席率の高さ(昼夜・休日を問わず)と、存在感の大きさは、一目瞭然です。出来ることなら、このまま担当をずっと続けていただきたいと考えるのが人情ではありますが、末永く上ノ原の維持管理と保全・活用を進めようとするならば、町当局にも一層の組織的対応をお願いしなければなりませんし、森林塾青水側も個人の努力のみに頼らず、新たな活動のステージを目指していかなければならないでしょう。



2008年4月26日 悪天候の中での4者協議(野焼き順延)

みなかみ町の立場から見れば、この10年間は、まだまだ怪しい集団であった森林塾青水の「お試し期間」でもあり、そのお目付け役として最適任という白羽

の矢が木村さんに立てられていたのかもしれませんが、挙げ句の果てには塾の現地幹事の一人という立場までお引き受けいただくという暴挙(?)にまで発展してしまいましたが、何食わぬ顔でお付き合い下さったことに対し、改めてお礼の言葉も見つかりません。

何はともあれ、藤原地区及び上ノ原がみなかみ町にある限り、再びより高い立場から木村さんのご支援をいただき、あるいは共に働く場面が必ず訪れると思いますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。(了)



2012年4月28日 環境課の仕事として、放射能監視区域の説明もしていただきました

⑤消毒済みのボトルを用意、冷めたらボトリング(80 入り瓶に注入) →合計 12 本:96 ㍓も！



惣一郎、純一、一幸、友紀、仁、岡野夫妻 & 友人、ゑみ子、武子、典子、智子の皆さんが来館して下さり、和やかに試飲会。おおむねご好評でほっと一息。

感想・意見交換会の後、今後の取組み方針・計画など説明。午後：協力民宿「樹林」「吉野屋」「関が原」「やまびこ」に80 入り瓶配布、試飲とフイードバック依頼。さらに、日頃お世話になっている地元の皆さま方17軒に 500ml 瓶を各戸訪問配布して、同様のお願い。

以上、3日間を通して延べ 23 人もの地元衆の参画をいただいた。しかも、ゲートボール仲間のシニア層から一幸、友紀、北山のヤング世代まで。正に、首都圏住民と地元衆が入り会っての協働作業であり、まことに画期的なコラボ活動であったと自画自賛したい。

実は、それもこれも元はといえば、山口夫人・キキさんの『一滴の水の恩に、泉をもって返すべし』という感謝の気持ちの賜物であった。若い頃、いつも中国の自宅マンションの屋上で遠い山々を眺めながら夕陽が沈むまで勉強していたキキさん。日本に来て間もない頃、言葉が分からない友達もいない、そんな寂しい気持ちを癒してくれたのは上州の烏川や奥利根藤原から見る遠い山々だった。故郷の温もりを感じ、今日まで頑張ってきた。その感謝の気持ちをもって、中国原産の紫蘇からジュースを作り藤原の名産にして恩返しをしたい。その一念で企画を練り上げご提案をいただいたのが事の始まりだったのだ。

是非、時間をかけ良い味に仕上げ地元の名産として、藤原むらづくり協議会が再興を期す「物産直売場」の人気商品に育て上げる夢を現実のものにしたいものだ。

紫蘇濃ゆき一途に母を恋ふ日かな 波郷
2013年 8 月 6 日(清水)

□ 真夏の青刈り奮闘記

松澤英喜

7 月のコモンズ「防火帯整備と昆虫調査」はあいにくの悪天候のため、予定していた防火帯作り(青刈り)を完遂できず、後ろ髪引かれる思いで藤原をあとにし、それで今回はお盆休みを使って平日の臨時リベンジツアー。

8 月 23 日金曜日朝 7 時、草野隊長以下 4 名の精鋭が埼玉県是三郷駅に集合、66 歳の某氏運転の 12 歳の小型車に分乗、渋滞と雨にもかかわらず外環道、関越経由 11 時過ぎに藤原到着。

まず、いつもの倉庫に立ち寄り。かさばる刈り払い機は北山幹事が出勤前に上ノ原に揃えておいてくれるとのこと、その他の小道具類を積み込むためだけ、シャッターを開けてびっくり仰天。なぜって、いつもの「片づけられない女」状況の倉庫でなくて、スッキリ整然と片づけられてい

て、「潔癖症で女性も寄り付かないマザコン男子」状態、こんな見たの生まれて初めてです。

さて、上ノ原。天気予報では昼過ぎから雨とのことで、腹ごしらえ済み次第すぐ始めよう、あとは雨でも嵐でも勢いがついていれば大丈夫、との作戦。車の中で弁当を食べて、多少雨足が収まったところでいざエンジン点火。みなかみ町が須田建設の協力で管理道を整備してくれていました。



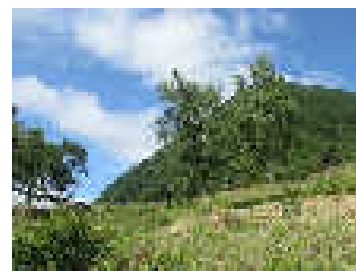
写真のとおり立派に出来上がっておりさに期待以上。これなら防火帯も万全。須田建設、おぬし出来る。

町の貴重な予算の中から数十万円を割いていただき、茅、1年 3000 束だけのためなら、一束 200 円のコスト？いえいえ、これからずーっと大事に使います。茅束の販売はほんの序の口、皆でしっかり使えば生物多様性や安らぎというお金に変えられない価値を生むんです。

立派な管理道を見て勇気が出たところで、林縁部と十郎太沢沿いの二手に分かれ、作業開始。一人が片側の境界線を刈り、もう一人がそれを目印に5~10メートル幅に広げていくという態勢。さて、順調にスタートしたものの、その後雨足は強まるし、眼鏡は曇るし、ちょっと振り回すと切り株にあたるしで、もうやけっぱち。平坦地じゃないことはもとより覚悟の上だが、でこぼこ凸凹、落とす穴だらけ、えーいこれくらいで文句言うな、お父さんやお爺さんはもっと重い鉄砲もって、敵地を行軍したんだぞ、なんて時代錯誤の想いが頭をよぎる。

途中雷で何回か休んだり、燃料補給でしばしの中断、これがちょうどよい休憩になって、地獄の行進は順調にすすみ、夕方近くにゴルフ場の管理棟が見えてきて、これがゴール。雷雨さん、ありがとう、お蔭で熱中症にならずに済みました。

どうです、きれいに刈れたでしょう。(この写真は、後日撮影したものです。当日は泥まみれ、写真はとれませんでした。



そんなこんなで、この後、きれいに片づけられた倉庫にてパンツまで着替え、ついでに、十郎太沢の冷水で冷やしたスイカを(鉈で割って)食べて、ほっとお疲れ様。どこのどなたかか存じませんが、倉庫片づけてくれた人、本当にありがとうございました。今度はシャワーもよろしく。(なんて無理いな)

よかったこと：きれいに防火帯ができました、来年の野焼きは大丈夫です。思っていたより茅がよく育っていました。倉庫がきれいに片付いていましたよ。管理道、すばらしい。ハチや雷の被害、熱中症、怪我、オールフリー、カロリーゼロ。雨や汚れは洗えばとれるもの、厭ってはいけないという真実がわかったこと。交通費(ガソリン、高速代)一人当たり 2500 円をみの低コストでよい汗をかけたこと、エコロジーはエコノミーでなくっちゃ。なあんだ、良いことばかりでした。とやけっぱち。(了)

★ 会員便り

海老沢秀夫

中山道日記／28 日のフットパス

～定年退職記念「中山道旅日記」～

「そうだ、中山道を歩いて帰ろう」と思い立ち、「定年です」と言われて東京暮らしが終わったこの4月、東京の寓居をひきはらい、家のある滋賀県へ帰る旅に出た。東京とわが家は新幹線とJR湖西線を使えば3～4時間の距離。でも、それではあまりにも早く、13年いた東京の去り方としてはバランスがよい。東京のにおいがついたまま家に戻ってしまうことになる。自分の足で東から西へ、ビジーな東京をできるだけスローに離れることにした。

中山道は江戸日本橋から京都三条大橋まで532.8キロ。これを江戸時代の人は半月ほどで歩いたらしい。1日約40キロ。それを私は2倍の28日かけた。1日約20キロの計算になる。でもしよっちゅう道をまちがえ地元の人がトラックに乗せてくれたり、これはすごいブロッコリー畑だと寄り道したりしていたので、30キロは歩いたかもしれない。1歩は1メートルにも満たないけれど、歩み続ければ積小為大（せきしょうだい）、ちりも積もれば千にも万にもなることを実感した。イチニ、イチニ。毎日故障することなく動き続けてくれたわが足に感謝。

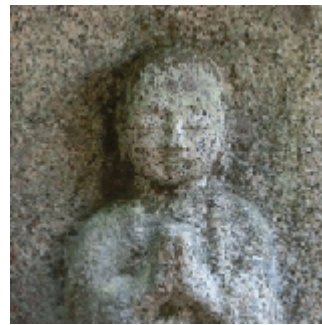
歩く旅の良さは交通費が節約できることではない。時間がかかること、そして行く先々の土地の風景の変化が至近距離で体感できること。においや音や温度が付いた風景が、身体ぜんたいに滲むように伝わってくる。あふれんばかりの東京の雑踏、土のかおりがし始める埼玉、まわりの山々が目にさやかな群馬の高原野菜畑、冷たくて乾いた風が吹きつける信州佐久盆地の果樹園地帯、ざあざあと音を立てて流れ下る木曽川とともに歩む木曽路、土地の人の話し言葉が西のアクセントに変化する恵那、そして懐かしの伊吹山が少しずつ大きくなって、関ヶ原を越えるとそこは水のかおりただよう近江の国だ。そんな連続する風景の変化の先に旅の目的地があると思えば心もはやる。でもなかなかたどり着けないもどかしさ。そんなこんなを足裏で記憶するように、じっくり進むのである。

道中、28の宿に泊った。いろんな宿があった。分類するとこんな感じ。カプセルホテル、素泊まり旅館、2食付旅館・民宿、ペンション、ビジネスホテル（素泊まりか朝食付きの2タイプ）、B&Bタイプのミニホテル。それぞれ旅の先々で予約するので当たり外れはあったけれど、1日歩いて薄汚れ、疲れた身体を安らげるのにいちばんうれしかったのは、手入れがゆきとどいた清潔な部屋とお風呂だった。

ところで費用のこと。合計で23万3600円。内訳は、宿代18万7800円、ビールなど飲みもの代1万1800円、食事代2万1500円、途中で買った地図や着替えなど装備代1万2100円、通信費500円。1日平均8300円ほどだった。ビールを飲まなかったら8000円以下になったじゃないと言われたが、そんな旅はあまりしたくない。

中山道から5か月。私の足はふたたびフットパスを渴望している。「ニホンのカントリーサイド歩いてマス。木曽のフットパスすばらしいデス」という馬籠で同宿したオランダ人に、「スペインの巡礼フットパス、ぜひ歩いてみてクダサイ」と勧められたがその予定はない。もっと身近な地元テーマでやりたいと計画中だ。でも帰宅後の生活はけっこうあわただしくて、なかなか準備にとりかかれないでいる。「ゆっくりやりなさいよ」と天使はささやくけれど、中山道フットパスの写真整理さえ終わっていないのだから、新しいフットパスへの道のりは遠い。

(了)



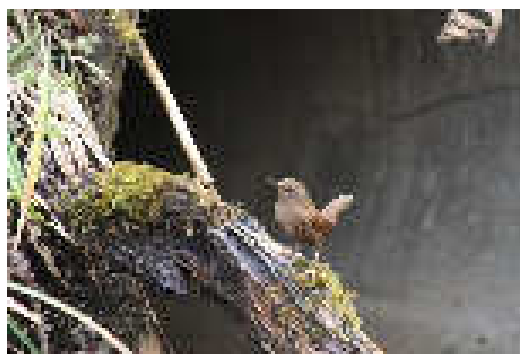
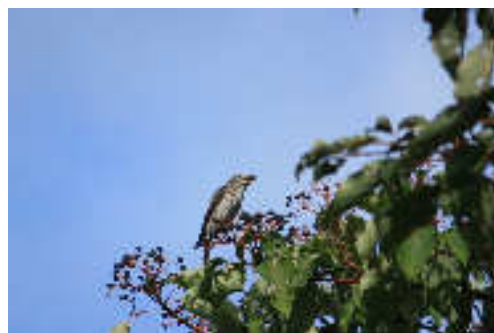
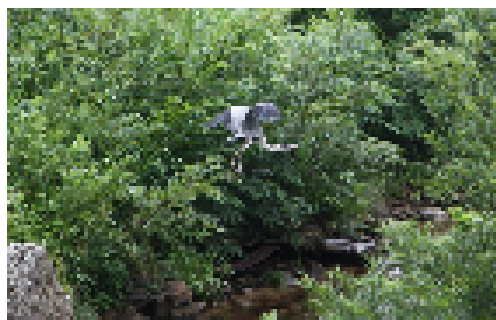
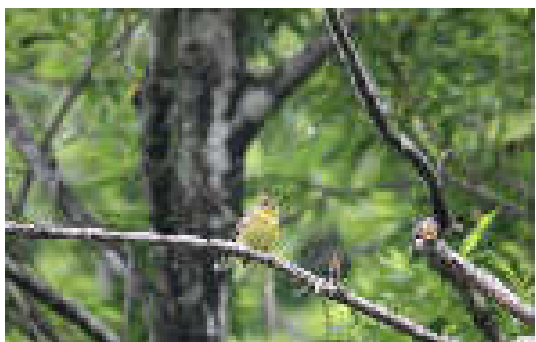
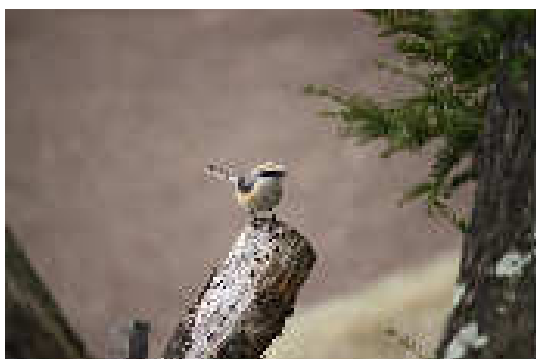
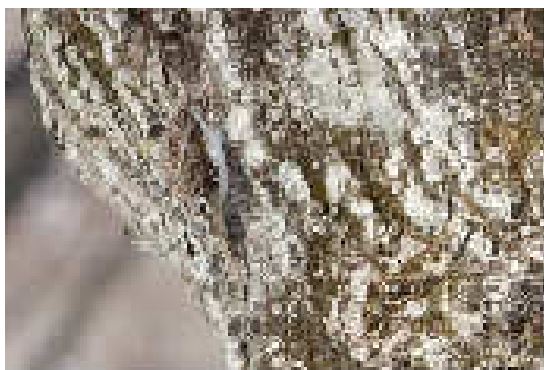
海老沢様からは、今お住まいの滋賀県高島市地子原地区において昭和28年水害以上といわれる大水であちらこちらで被害が続出し、その対応のボランティア活動でご多忙の中、ご寄稿をいただきました。原稿をお送りくださる際、ちょっと考えさせられる添え書きをつけてくださいました。編集子だけで読むのはもったいないので、以下ご紹介します。(編集子)

「今度の台風で地区の飲料水（簡易水道）が使えなくなり、きのうの夕方やっと水が出るようになりました。山の水が原水なのでまだ少し濁っています。地区にはもうひとつ、山の中に自前の水源があるのですが、これも大量の土砂流入でストップし、丸3日かけてみんな（5人ほど）で復旧工事をしました。山に入って堰にたまった石や砂をかきだし、破損したパイプを付け替え、今日の昼前にやっと仮復旧し、とりあえず水が出るようになりました。わが家では、この水でいろんな物を洗ったり、手を洗ったり、ビールを冷やしたり、冬には融雪に使ったり、金魚を飼ったりしています。ないと不便な生活用水、環境用水なのでほっとしています。金魚たちもうれしそうです。それにしても、川や沢にはたくさん水が流れているのに使える水がないということに困惑しました。相当努力しないと水は得られないということを実感した次第です。

お便りの日付は2013年9月22日です(編集子・注)

藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑥

地元・中村智子さんの、見てほっとする“photo”ショット・コーナーも回を重ねて第6回。今号は、藤原で見られる留鳥を中心に編集していただきました。(編集子)

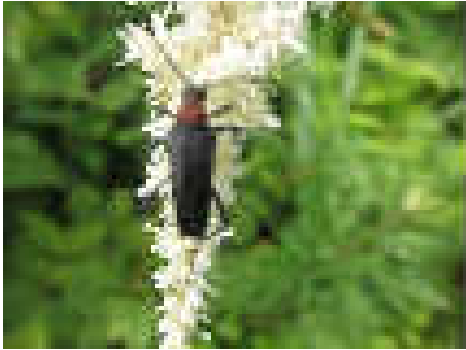


自宅の近所(大芦)と矢木沢で撮った野鳥たちです。左列の上から順にキバシリ、モズ、アカゲラ、ノジコ(夏鳥)、アオサギ、エゾビタキ(旅鳥)、チゴハヤブサ、ミソサザイ、アオゲラです。詳しくは、図鑑で調べてください。(智)

□ 編集後記 ～塾長のつぶやき～

○昆虫王国を支えるマルチハビタット

表紙の写真に「上ノ原は昆虫たちのゆりかご」との説明を付した。『季節のミニアルバム』では、多葉田さんが14種の夏のチョウを紹介して下さった。これから順次紹介していくことになるが、上ノ原には他にも、ハチやトンボ、バッタ、カミキリムシ、ハムシ、カメムシなど、無数の虫たちがそれぞれ好みの草花をみつけて様々な命のつながりを構成している。そして、その昆虫たちを啄ばみにこれ又無数の鳥類が飛来し、その又頂点にクマタカなどの猛禽類が君臨する。



上ノ原は草原と森林と十郎太沢という水辺空間から成り立っている。『このような複合生態系の下では、生物多様性が高まるだけでなく、一般には絶滅危惧種になりやすいマルチハビタットユーザー(複数の生態系を利用する動物)の生息が可能になる』と教えて下さったのは西廣先生。同じ草原内でも、平地と斜面あるいは日当たりの良し悪しなどの条件により更に再分化されている。

これからも、このモザイク状生態系を大切にしつつ、上ノ原が**昆虫王国＝あらゆる生き物たちにとってのゆりかご**であり続けるよう愛情を注いでいきたい。

○木村さんと共に歩んだ10年

当塾初代塾頭だった広川さんを介して、水上町役場の木村さんと最初に出会ったのは2002年10月。その時いただいた建設農林課の名刺を後生大事にとってある。町有遊休地の森林を使ってみないか、とのお声掛けだった。

これは厭あれも駄目とさんざん我儘言わせてもらって、仲間の皆も気に入ったのが元・入会山「上ノ原」。以来10年のお付き



合いで、41歳だった木村さんは51歳、62歳だった小生は72歳に。笹岡顧問の謝恩代表メッセージにもあるように正に、木村さんと共に歩んできた森林塾青水の10年であった。

その木村さんが農政課に移動となった。聞けば、管理放棄田などの活性化対策などが新任務の由。そこで、「藤原には大滝沢はじめ対象地が沢山あるので、是非ご視察ご検討を」とご提案申しあげた。かくして、木村さんとのご縁(良縁・腐れ縁?)はまだまだ続く!

○異常猛暑と米の作柄と白鷺の増加

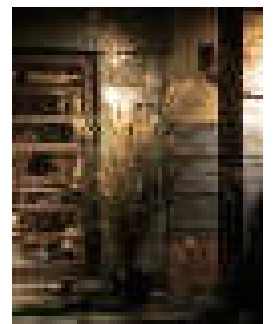
9月16日、台風一過の見沼田んぼへ。応援している若い自然農法家が手掛けている古代米(刈り取り前)が気になったので見に出かけた。幸い、穂は傾いていたが大丈夫だった。居合わせたベテラン農家さんに、既に収穫した今年米の作柄を訊ねると「不満足です。このところ、猛暑続きの上に集中豪雨などで、作柄は年々悪化傾向」。「暑さに強い雑草がふえ、それにつれて虫もふえ、それを目当てに白鷺も目立ってふえてきた」とも。

一方、このところ「上ノ原のススキの生育が良くないので」と心配する声を聞くようになった。刈り取りが過ぎるので、火入れが出来てないからでは、いや異常気象の影響ではないか、など素人同志がああでもないこうでもないと言ってる矢先のお話だった。

名だたる豪雪地帯の藤原も年々降雪量が減少、棲みつかない筈のイノシシが猛威をふるい出し、ヤマヒルまで運んできた。2年前だったと思うが、上ノ原でテントウムシが異常大発生した。星の数から推測して野菜類の天敵とされる悪役だったらしい。やはり、根本原因は異常猛暑～温暖化ではないのか。いずれにしても、科学的知見にもとづく原因究明と対策を急ぐべし。山崎先生、小幡先生、西廣先生はじめ、実践的研究フィールドをお持ちの先達のご指導を是非いただきたいものだ。

○十五夜の名月は上ノ原で愛でよう 9月19日。最員の古民家カフェ&レストラン「温々」の満月パブに出向き、中秋の名月を楽しんだ。玄関入口の大甕にススキの投げ入れ。まことに気持ちの良い見事な演出であった。

そこで思った。来年9月の「一般参加歓迎プログラム」は十五夜の日にあわせて開催しよう。勿論、メイン会場は上ノ原。夕闇せまるころ虫の音に耳傾けつつ、篝火を焚く。十二神様をお迎えして、いつもの盤座にお神酒と豆団子などお供え。(9月は豆名月、10月は芋名月と呼ぶ由) 腕に覚えの誰かさんが草笛吹き出すと、たちまち虫たちと大合奏。そのうち、浮かれて踊り出す輩も登場……。主催は地元、一幸さんたち「藤原むらおこし委員会」の若者衆。当塾や「のらえもん」の流域仲間たちは、客分として遊山に参じます(笑)。これって、実現可能な夢です。



畦行かば白鷺ふゆる野分あと

(青)

茅刈りのご案内 10月26日(土)～27日(日)

上ノ原「入会の森」で、恒例の茅刈りをします。「講習会」付き、初心者歓迎です。秋の草原の散策も楽しめます。

集合は26日の午前10時20分、JR上毛高原駅。参加費1万円(宿泊費、3食費など)。初日の昼食は各自持参。詳細は、ホームページ(<http://commonf.net>)で▽申し込み・問い合わせはホームページから。

または事務局(電子メール: jimukyoku@commonf.net、FAX03・6228・3504)へ